

デザイン・アート活動がけん引する リノベーションまちづくりの実践研究 その3

Practical research on renovation and town management driven by design and art activities Part 3

津村 泰範
TSUMURA Yasunori

徳久 達彦
TOKUHISA Tatsuhiko

山田 博行
YAMADA Hiroyuki

ヨールグ ビューラ
Jörg Bühler

遠藤 良太郎
ENDO Ryotaro

キーワード：デザイン・アート活動、長岡市中心市街地、リ
ノベーションまちづくり

Keywords : design and art activities, central urban area of
Nagaoka city, renovation and town management

In order to maintain urban management in the face of rapid population decline, it is necessary to promote the creation of a compact city in Nagaoka by consolidating functions in the central city area and the central part of the merged area. However, in the current state of the central urban area, utilization of idle real estate (low unused space) described above is not progressing. For this reason, the practice of renovation and town management is also desired in Nagaoka.

In renovation and town management, activities related to design and art are one of the essential contents for utilizing idle real estate. Therefore, we will create a team of faculty members across departments and attempt to develop renovation and town management that is driven by design and art activities in the central urban area of Nagaoka.

1. はじめに

長岡造形大学の所在する長岡市では、2010年代に入り、中心市街地の再開発手法による再生整備が進行中である。これは、2006年3月に、長岡市が、郊外分散した都市機

能をまちなかに回帰させることの促進と、防災性と利便性の高い中心市街地を創造することを目標に策定した、中心市街地における都市再生整備計画によるもので、学びと交流の拠点施設である「まちなかキャンパス長岡」と長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」が2011年に、シティホールプラザ「アオーレ長岡」が2012年に、社会福祉センター「トモシア」が2016年に、それぞれ再開発ビルを整備してオープンし、今後も地方創生の拠点である「米百俵プレイス（仮称）」の整備計画が進行中である。

その一方で、こうした再開発等の大規模事業対象地域外では空きスペースが増大している。中心市街地の再生整備に伴い、1階部分の主要道に面する空きスペースの中には飲食店等の出店が見られるものの、2階より上層または地下階は空き状態が慢性化しており、低未利用空間は少ない。このような状況の背景にはオーナーたちも積極的にこの状況を打開する策を持っていないことも明らかになっている。

急激な人口減少の中で都市経営を持続していくためには、長岡においても中心市街地や合併地域中心部への機能集約によるコンパクトシティ化を進める必要がある。しかしながら中心市街地等の現状は、先述した遊休不動産（低未利用空間）の活用が進んでいない。このため、長岡においてもリノベーションまちづくりの実践が望まれるところである。

リノベーションまちづくりとは、遊休不動産に新しい活動を埋め込むリノベ事業を徒歩圏内で次々と生起することによりエリアを活性化する手法であり、近年大都市圏のみならず地方都市でも取り組み事例が拡大してきている。そうした事例ではデザインやアートに関わる活動が遊休不動産活用の必須コンテンツの一つとなっている。

そこで、学科横断的に複数の教員でチームをつくり、長岡の中心市街地を主たるフィールドとして、デザイン・アート活動がけん引するリノベーションまちづくりの実践を試みることが、本研究の主たる内容である。

本研究には2つの関連既往研究がある。一つは、2016年度～17年度に行った、長岡市からの受託研究（2016年度「まちなか建物更新等調査研究業務」、2017年度「長岡市まちなか建築リノベーション調査研究業務」）であり、リノベ事業のスキームや支援方策について机上検討を行ったもので、「長岡造形大学デザイン研究開発報告書」（平成28年度、29年度）に報告がある。もう一つは、「長岡の中心市街地におけるデザイン・アートワークの役割」（2015年度～17年度、本学特別研究）であり、賃貸した第一安達ビルをセルフリノベしてつくった拠点「プリン長岡」（プリン＝プロジェクト・リンク）において、デザイン・アート活動を試行的に実施したものであり、「長岡造形大学紀要」14、15、16号に報告がある。前者の研究では、長岡のまちなかでリノベーションまちづくりを行うには、リノベーションまちづくりの考え方を、いかに市民のなかに浸透させつつ、じわじわと気運を醸成していくかに尽きることがわかったが、同時に、現時点でのリノベ事業者不在の中、まずは身近に成功事例ができないと、将来的なりノベリノベーションまちづくりのプレイヤー候補に対して、説得力に欠けることも明らかになった。後者の研究では、デザイン・

アートスペースの実践の実験的研究としてのやるべき課題は、物件の確保、運営、プログラム、情報の共有など、多岐にわたり山積していることが浮き彫りになった。それまでは、これら二つの研究が、相互に連携することなく個々に行われた。

本研究では、リノベーションまちづくりの実践こそが重要との認識のもと、これら二つの既往研究の流れを一体化して研究の推進力を増強し、デザイン・アート活動をけん引役の一つに据えながら実際のリノベ事業の連鎖的組成を目指している。

本稿はその3年間の研究の最終年度の報告である。

2. 研究のサブテーマ

本研究は、以下の3つのサブテーマにより構成することを着手当初の目標として掲げている。(参考文献2参照)

1) 協議会の運営とリンクしたリノベ事業の組成促進

リノベーションまちづくりの基本プレイヤーは、場を提供してくれる不動産オーナー、コンテンツを担うビジネスオーナー、両者をマッチングしてリノベ事業を組成する家守会社の3者である。これら3つの基本プレイヤーを発掘・育成するとともに具体的なリノベ事業の組成を支援するため、長岡市と協働して協議会を設立・運営し、以下の活動を行う。※2018年度に協議会「長岡まちづくりサポートセンター(まちばん)」を設立・運営し進めることとなっている。

- ・リノベ事業に適した物件を発見するためのまちあるき
- ・事業化構想を立案するためのワークショップ
- ・リノベ事業に対する理解と実践意欲を喚起するための講演会
- ・グラフィカルな広報メディアの作成
- ・実践者予備軍と次々とつながっていく層の厚い交流ネットワークの構築(後述のデザイン・アート活動の人的ネットワークとも連結し、相乗効果を生んでいく。)
- ・具体のリノベ事業の組成支援(後述のデザイン・アート活動の新たな拠点を先導モデルの一つとする。)

以上の活動の結果にもとづき、最終年度(2020年度)において、地方都市の中心市街地におけるリノベーションまちづくりの実践手法についてとりまとめる。

2) 新しい拠点でのデザイン・アート活動の連続展開

2017年度までのプリン長岡(第一安達ビル)でのデザイン・アート活動は、ながおか・若者・しごと機構との共同利用という制約もあってインターバルが長くなりがちで、アートスペースとしてのイメージ構築や市民への認知浸透が十分に行えなかった。プリン長岡は2018年7月末に契約期限を終え、そのタイミングで契約を一新し、単独で第一安達ビルの2階を借用することとなったが、2020年3月で契約は切れる。そのため、新たな拠点探しを、前述の「長岡まちづくりサポートセンター(まちばん)」の支援を受けながら行う。新しい拠点は専用とし、ホワイトキューブとしての展示空間はもとよりさまざまな形態のイベントにも対応可能な創造的な空間となるように工夫する。運営面でも稼働率向上の工夫を凝らすとともに、旧長岡現代美術館や栃尾美術館、大地の芸術祭等との連携も視野に入れながら、以下の活動を行う。※最終年度の2020

年度当初も、当面は初年度当初予定通りの計画とする。

- ・公開制作、展示、トークイベント等のプロジェクトの企画・運営(教員主導で4本+学生主導で2本=年間6プロジェクトを想定。教員主導の場合はゲストを招へいする。)
- ・日常的な作業、ミーティング等の利用(一部はミーティングイベントとする。)
- ・グラフィカルな広報メディアの作成
- ・地域のデザイン・アート関係者との交流ネットワークの構築
- ・短期的なアーティスト・イン・レジデンスとしての活用(前述の協議会からの事業化支援を受ける。)

※2019年度より「長岡芸術工事中」という名称のイベントを開催

以上の活動の結果にもとづき、最終年度において、アートスペースの持続可能な運営手法についてとりまとめる。

3) 互尊文庫移転後建物のアートセンター化の構想立案

現互尊文庫は、表町東地区再開発により整備される「米百俵プレイス(仮称)」への移転が予定されている。現互尊文庫の建物は近代建築としての文化的価値を有し、また、敷地は隣接の明治公園とともに長岡の重要な歴史が刻まれた場所である。したがって、現互尊文庫の跡地利用について、本学として積極的に提言していくことの意義は大きい。そこで、先述の2つのサブテーマから得られた知見も活用しながら、移転後の建物を長岡のアートセンターとしてリノベーションする構想を立案する。※2018~19年度中にまとめた現互尊文庫の設計と建設の経緯を踏まえ、2020年度の検討を行う。

3. 2020年度の活動

1) 長岡まちなかりノベーションセンター「まちばん」

2018年7月に設立した、長岡まちなかりノベーションセンター「まちばん」において、研究代表者・津村が副代表となり、民間有志もメンバーに加えてリノベ事業の組成促進を図る活動を開始した。この組織は、リノベーションまちづくりを活用し、長岡のまちの魅力を引き出す、まちづくりの主演となる方々(プレイヤー)と伴走し、活躍できる出番を創造することを目的とした組織である。2019年度に入り一部メンバーの入れ替えが生じ(昨年度報告参照)、津村は代表に就任し、2020年度も活動を継続した。

2020年度は状況が一変した。2019年末より流行し始めた新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の拡大防止の措置として、2020年4月7日に国内で初めて緊急事態宣言が、東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の7都府県に発出され、4月16日には、その対象が全国に拡大された。2020年度当初はその対応に追われ、いわゆる三密(密集・密接・密閉)の回避が励行されたために、不特定多数の人が一堂に会するあらゆるイベントが、中止や延期に追い込まれた。5月25日には宣言が解除されたものの、7月末から第2波と呼ばれる感染拡大があり、実質的に活動をどのように行うか模索を続けた中、7月31日に行われた総会で、普及・啓発事業としての「まちなかキャンパス長岡」での連続講座「リノベーションまちづくりを知らう」、リノベーションまちづくりワークショップ等、いくつか2020年度の事業計画を提示し、承認が得られた。

ところが、その後も感染拡大は収束を見せず、講座も延期となった(2021年度に開催)。リノベーションまちづくり活動の一環として行う、後述する「長岡芸術工事中2020」に対しても開催がオンライン形式となることで行える支援事業がなくなった。そこで、独自の事業としてのリノベーションまちづくりワークショップを、摂田屋地区で開催することとし、「摂田屋エリアデザイン CAMP」という形で企画した。また、広報事業としては、活動のインターネット上での発信も引き続き行った。以下にそれぞれの概要を示す。

・「摂田屋エリアデザイン CAMP」

「まちばん」設立から2年経ち、長岡市内でもリノベーションまちづくりの事例が散見されてきたので、「まちばん」プロデュースで、市内事例の情報交換・発信をするような機会をつくる目的で、当初企画を立案した。事例の実践者が集結して市民に対して発信をする形式を想定していた。これには2020年秋に旧機那サフラン酒本舗再生第1号事例として「米蔵」をリノベーションした施設がオープンすることもあり、その場所でのイベントの予定であった。当初は、摂田屋エリア・与板エリア・柿川エリアでの実践者を交えて、どのような「活動」を、どのような「場所・空間」で、どのような「仕組み」で行っているのかを、それぞれのテーマで3回に分けて実践者の座談会のような形式で行おうと考えていた。企画案を煮詰める段階で、そもそも摂田屋ではまだリノベーションまちづくりが進んでいるわけではなく、それは与板、柿川でも同じことが言える、と気付いた。そこで、長岡において、エリアリノベーションの考え方や手法を用いて、まちの魅力や生活の質を高めることの実践を活発化するため、摂田屋(宮内駅からの沿道を含む)を対象に「エリアデザイン CAMP」を行うことに内容を軌道修正した。なお、この摂田屋を対象としたエリアデザイン CAMPを皮切りに、柿川沿い、与板など他の地区においても同様のCAMPをシリーズ化して実施していくことも検討している。

「まちばん」が主催、ミライ発酵本舗株式会社が共催とし、ディレクターは「まちばん」代表の津村、2017年度本学大学院(津村研究室)修士課程修了でエリアリノベーションの実務に携わる川合宏尚氏(株式会社スピーク勤務)がアシスタントディレクターを務めることとした。そして、渡邊義孝氏(NPO法人尾道空き家再生プロジェクト理事/一級建築士)をゲストとしてお招きすることとした。全国各地のエリアリノベーション先進事例の中でも尾道の取り組みは、地方都市における事例であること、歴史・文化の風合いを感じさせてくれること、生活に根差した観光・交流を大切にしていることなどの諸点において、摂田屋が学ぶべき好例であることが理由である。同氏は、国登録有形文化財の改修・活用プロジェクトの実践者でもあり、今後の旧機那サフラン酒本舗の他の建物改修・活用についても有益なアドバイスをいただけることも期待しての起用だ。会場は「摂田屋6番街発酵ミュージアム米蔵」、開催日はプレCAMPが摂田屋まち歩きとともに2021年1月9日、本CAMP1回目を2月13日、本CAMP2回目を3月13日に行うこととし、それぞれテーマを「エリアリノベーションを尾道に学ぶ」、「摂田屋のまちの将来ビジョンを考える」、

「わたしたちは摂田屋のまちのためにこれから何にどう取り組んでいくか」と設定した。

まずプレCAMPは、渡邊氏も交えた摂田屋のまち歩き、渡邊氏より尾道の事例紹介のプレゼン、川合氏よりエリアリノベーションについてのレクチャー、「摂田屋をどんなまちにしたいか」についてミライ発酵本舗メンバー各々によるプレゼンである。それらを受けて参加者で意見交換を行い、次回・次々回の本CAMPの構成・内容を決定する。また、米蔵内の事業パートナーである鈴木将氏や、摂田屋の蔵元たちの若手キーパーソンたちにも自由に意見交換に参加していただき、さらには、次のCAMP候補地である柿川、与板の関係者もお招きし、渡邊氏、川合氏のプレゼンや意見交換の様子を見ていただくこととした。参加者は、主催者の「まちばん」と共催者(ミライ発酵本舗)メンバーとその関係者の他に市の関係課の皆さんなどで、本CAMPは一般参加も可能とした。

2021年1月はコロナ禍だけでなく長岡は大雪であった。公共交通機関の麻痺も予想され、ゲストの渡邊氏の尾道からの往復も順調にいかない可能性も高く、残念ながら1月開催は延期とせざるを得なくなった。そこで、プレCAMPを3月13日~14日の二日間、本CAMPは年度をまたぎ、4月17日、6月14日とし、仕切り直して開催した。

3月13日に行われたプレCAMPは摂田屋6番街発酵ミュージアム米蔵に集合し、オリエンテーションの後、ミライ発酵本舗の先導でまちあるきを開始し、旧機那サフラン酒本舗~星六~長谷川酒造~星野本店~越のむらさき~吉乃川酒造「醸蔵」と巡り、摂田屋6番街発酵ミュージアム米蔵に戻ってきた。雨が降ったり止んだりの悪天候の中、各蔵元さんたちのご自身の生業とその場所との矜持の籠った説明が印象的で、コーディネートをしたミライ発酵本舗の斎藤篤氏のご尽力もあって、渡邊氏を含む参加者に摂田屋地区のポテンシャルが大いに伝わったように思った。

翌日3月14日の渡邊氏の「空き家の魅力が人を呼ぶ~尾道空き家再生の軌跡~」と題したプレゼンテーションは示唆に富んでいた。まず広島県尾道市について、観光地としての斜面地景観と「住みにくさゆえの空き家」の増加、寺めぐりルートと映画のまちではあるが「それ以外の建物」はどうかという説明があった。次に「NPO尾道空き家再生プロジェクトの十年」として、ひとりの女性と空き家との出会いから始まり、自腹でポン!とその空き家を購入し、格闘する中で結集したさまざまな専門家が混じった仲間がNPO化した経緯を語り、「直営再生」物件20件のなかから、①尾道ガウディハウス…1933年築/登録有形文化財、②北村洋品店…戦後のかわいい洋館、大胆改装、NPO事務所、③三軒家アパートメント…サブリースによる「文化発信地」化、④あなごのねどこ…商店街の空き店舗、ゲストハウス化し雇用創出、⑤みはらし亭…1921年築/登録有形文化財、空前の難工事、⑥大広間…1950年築/駅前旅館の離れ、格天井、資金集めといった6件のエピソードトークがあった。そして、空き家バンクについては、2009年に尾道市から業務委託を受け閉鎖型システムでの情報提供をしていること、8年間で約80軒超の成約があり200名の人口増となり、若い世代が多く年間新生児も15名を数えること、その中には、住宅、カフェ、宿泊施設、アトリエなど

に自力で再生する例があり、市との連携と移住者へのサポートメニューの充実がその背景としてあり、町内会を担う若者たちも増えていることが紹介された。最後に、空き家再生を支える思想について、空き家は「負債」ではなく「宝の山」であり、「かわいい」とか「レトロ」とかの価値観に学術的価値づけをするような建築専門家のかかわり方の方向性を提示した。また、そこでは、自由に内部をリフォームして活用できる登録有形文化財という「ツール」もあり、結果として、エリアとしてのリノベーション：点から面への可能性を描けることを述べた。

その後川合氏から井の頭線高架下化工事の一部完了に伴い利用可能になった高架下の利活用を実験的に行った下北沢ケージの事例が紹介され、同氏は、東京でも新たな土地利用をする前には数年かけて実験を行い、どんな方々に対してどのような事業がマッチするかを確認していることを強調した。エリアリノベーションの考え方はそのエリアを動かす主体がそのエリアのビジョンを考えることが肝要と締めた。

それを受け、ミライ発酵本舗メンバーひとりひとりが、「近者悦・遠者来」のまち、「発酵暮らし」のまち、「生活者の満足と来訪者の満足が共振・融合する」まちなど、ミライ発酵本舗が考えてきたことを渡邊氏や会場の参加者に伝えた。プレCAMPはここまでで、次回に宿題として、参加者（特に撰田屋の蔵元）が「撰田屋のいいところ」をそれぞれ発表し、意見交換を行うこととし、散会した。



写真01 まちあるき（星六商店）



写真02 渡邊氏講演



写真03 川合氏講演



写真04 ミライ発酵本舗プレゼン

プレCAMPで、共催であるミライ発酵本舗のメンバーの中でも実際はエリアに対するビジョンが明確に共有できていない可能性があることが分かり、「まちばん」は方向性を導き出す手助けをする必要があることを認識した。

4月17日の本CAMP 1回目は、吉乃川酒造醸蔵2階会議室を会場として開催した。プレ回の内容を振り返った後、各蔵元を代表しての参加者が思う「撰田屋のいいところ、いいなと思うまち」を発表した。皆一様に今までの流れを次世代に色々継承していきたい気持ちが強いことが分かったが、今後については「観光地としてあるべき姿」の提示だけでなく、まちづくりにそっぽを向いている住民とどう向き合い付き合っていくのが大事だという意見もあった。製造業と住宅で構成されているこのエリアに対して、改めて魅力は何か、その答えを掘り下げるべく、後半

のパネルディスカッションに移った。

まず冒頭に渡邊氏からは、観光優先か、住民の暮らしを重視するか、という対立は実は尾道でも存在し、普通の暮らしが失われないことが観光客にとっての魅力の継承にもつながっていると感じている、という発言があった。長岡市環境部長・相田和規氏からは、都市計画課長として旧機那サフラン酒造整備の説明のため周辺住民たちと接したエピソードを踏まえながら、これからの撰田屋は、いっぱい観光者が来るおもてなしのまちにするのではなく、品格のあるような文化を噛み締めるような観光を目指すべきで、大事なものを、伝えたいことをお客さんと共有できるかが大事だと述べた。江口だんご社長・江口太郎氏は、古民家を使った店舗をつくり上げるまでのお話をさせていただき、「撰田屋は300年続いているまちであり、2004年の中越地震で被災しても諦めず残してきたことで、振り切ってやるのが自然に出来ている。撰田屋の皆さんは、基礎調味料しかない謙遜しているが、それが揃っていることはすごいと思う。“おいしい理由が撰田屋です”と言えたらいい。これから動き出したら仲間が増えていくのではないか。」と述べた。ここで会場のSUZUグループ鈴木将氏から、米蔵内に出店したおむすび屋は、サフラン酒を始めとした6蔵を、おむすびを通じて伝えていくことをコンセプトとして始め、元々若い女性層に支持されていることもあって、今までの高齢者とは異なる客層が来始めていること、また、コロナ禍で飲食業界は厳しいが、「おいしい」体験の場として蔵を伝えていき、食に限らずいろんなスモールビジネスが撰田屋で生まれていくことを期待・希望する旨の発言があった。

これらを受け、2年前に設立したまちづくり会社ミライ発酵本舗の高田清太郎社長から、その設立経緯とこれまでの歩みを踏まえ、「1つ1つの蔵が連携することで力を発揮できる可能性があり、これまではなかなかアクションを知る機会が無く困っていたが、それぞれの立ち位置が見えるようになって良かった。」とコメントがあった。また、まちばん副代表でながおか起業支援センターClip代表の高橋秀明氏からは、「リノベーションまちづくりは、欲しい暮らしは何なのかを考えることであり、空き家を使う理由は、投資回収が速いからだ。起業してから、1年で約半分、3年でさらに半分、10年で1%未満しか生き残ることはできない。そういった観点で、蔵元の皆さんはすごい。ビジネスを続けていく上では、あまりやりたいことをやらない方がいい。裏を返せば、お客様のニーズがあるかということで、まちの課題を解決できるビジネスが大事だ。空き家でどういうコンテンツが必要なのかを考える必要がある。既に、撰田屋は蔵元の連携、関係作りは出来ているが、撰田屋のまちの色が見えると、起業希望者に案内しやすい。」と、起業の視点からのポイントを述べ、「金峯神社付近でリノベーションまちづくりをしているし、他にかきわびらき、与板など、色々な動きが出てきてスモールエリアができ始めている。まちばんは、これらをつなぎまちを盛り上げていく活動をしていければと考えている。」と、改めて我々の立場を確認して締めくくった。

最後に改めて鈴木将氏より「みんなが同じ方向に揃う必要はないが、アフターコロナで新しい観光のあり方をどうするのか気になる。自分は正直米蔵に出店してすぐに利益

は出ると思っていないが、あえて若手のエースを投入して、その子にコミュニティを作ってくれと頼んでいる。このように、みんな目に見えない投資をしているので、それぞれが何を目指していくか方向性を絞って小さな積み重ねをして話し合うことが大事だ。」と先行してコンテンツビジネスを担う立場からの貴重な発言があった。

関わる人たちの自由闊達な意見交換が行われ、それぞれにとって地域を考えるきっかけになったと言える。

6月14日の本CAMP 2回目は、今回議論している撰田屋エリアを再定義する（エリアリノベーションの範囲を決める）ことから始め、すでにある資源をキーワードで書き出し、まちのポジショニングを定め、エリアビジョンを「まちばん」から提示することとした。

その前に渡邊氏から「住民主体のまちづくり」と題して、尾道に住みたい・関わりたい層が、どうやって増えていったのかを話題提供していただいた。移住者たちは尾道に関わる人とのつながりがきっかけで移住を決意した。ただ、決して移住は誰でもウェルカムというわけではなく、空き家バンクはクローズシステムで運営しており、三軒家アパートメントでも新規入室審査があり、適者が集まるような仕組みをとっている。さらに、NPO 尾道空き屋再生プロジェクトだけで移住促進を行っているわけではなく、その他の人や団体とも緩い関係で相乗効果を生んでいる。自力で探した先駆者たちや、映画にかかわる人びと（シネマ尾道、尾道フィルムラボ）、米国から来て農場をやっているトーマス、アキチ公園と子どもたち、アーティストとの協働、滞在する作家たち（ライターズ in レジデンス、映画監督の宿）、東京工業大学真野洋介研究室とのかかわりなど、多種多様な登場人物のエピソードがあった。そして、移住者たちがつくった新しい店舗やスタジオがまちの価値を上げ、町内会の再構築をし、草刈りやシテイクリーニングに積極的に関与し、結果的に地域コミュニティを支えるようになる好循環があることを教示した。NPOの発信戦略は、チラシのデザインを重視し、尾道市立大学美術学科とのつながりを有効に使うだけでなく、常に「誰に向けて作るか？来てほしいのは誰なのか？」を明確にしておき、つまるところ、持続する市民運動とは何かと問われれば、個々が何らかの得をするか、楽しいかが原点であり、ふれずに、常に立ち返るテーマを持つことが重要であると強調した。

ここからは、図1に提示するスライドで「まちばん」から「ミライ発酵本舗」が先導する撰田屋エリアに、エリアビジョン等のたたき台となる案を提示した。あとはこれらを自分たちなりに練り上げてより具体化することになる。

このようにエリアデザインCAMPを通して、「まちばん」は、まち全体をより良く楽しく暮らしやすくしていきたいかという本来の家守団体的視点を持った人たち、組織の育成、課題解決手法のアドバイスをする役割を務める必要がある、と再認識した。現在のリノベーションまちづくりはワークショップ形式で行政が中心となり構想策定を行っている地域が多いように見受けられるが、そのなかでは、実際にまちを動かす当事者を巻き込んで構想策定している地域は面的なりノベーションが進んでいるようである。今回のエリアデザインCAMPのようなことは民間企業では収益にならないが、公的な組織だからこそできることであり、

今後、民間では収益性が伴わなくていけないことを「まちばん」としてやっていくのも一つの方法かもしれない。まだ長岡市内の家守団体が生まれそうな地域は本来持つべき稼ぐためのマインド、そのエリアをどういうまちにしたいかというビジョン発信が弱い印象がある。当事者では気がつかない部分に対して、俯瞰した立場でアドバイスできる組織であることに「まちばん」の大切な存在価値がある。当事者を増やすための事業として、旧市街地に住むことへの魅力発信（市街地拡大の抑制）や、トライアルステイ事業を長岡市の政策として行っていただきたい。

こうしたエリアデザインCAMPを「まちばん」の基幹事業の一つとし、毎年リノベーションまちづくりの萌芽の見られるエリア数か所でエリアの課題を見つけ、将来ビジョンをみんなで一緒に作成するようなワークショップを実施し、そうした地域で2～3年ごとに進捗の確認を行い、複数地域で毎年サミットを開催しそれぞれの地域の情報共有を行うことができそうだ。もちろん、そもそも地域資源が見つかるのか、「当事者」は誰なのか、適切なゲストが呼べるのか、事業としての採算スキームをどう描くか、アクションプランへの移行をどうするのか、どこまでテコ入れできるのか、など課題は少なくないが、地域でまちの共通認識を育むきっかけをつくる一つの形式はできたと思う。



図1 撰田屋エリアデザインCAMP 2回目提案スライド（抜粋）

・まちなかフィールドワーク

2020年11月1日および同月15日に、NPO法人すまいるらいふサポート主催（新潟工科大学樋口研究室と本学佐藤研究室・津村研究室が共催）の「まちなかフィールドワーク」が行われた。背景として、市有地である旧柳原庁舎跡地に学生向けの施設建設の計画があり、若い人達が中心市街地に住むことで生まれる活動を通して活気を取り戻す期待がある。本研究の一環として共催および参加をした。

第1回は長岡市中心市街地整備室の説明を受けてから、アオーレ長岡から大手通を歩いて柳原エリアを知ることから始まった。そこで楽しく暮らすヒントを考え、まちなかの人たちとの繋がりや連携のイメージを描き、何があった

らいいか、どんなことをやりたいか、そのためには何が必要か、コロナ禍の状況下での学生の住まい方などを議論しながら気づきを挙げていくワークショップとなった。

第2回は参加者の顔ぶれも少し変わった（津村は不参加）ので、アオーレを出発し再び柳原分庁舎跡地を訪れた後、互尊文庫や戦災資料館を回りアオーレに戻ってくるルートでまち歩きをした。そこで、「まちなか」がにぎわうには何が必要なのか、大学等で学んだことを活かしてどんなことをしてみたいか、まちなかに若者が住むためには何が必要なのか、をテーマとして議論するワークショップとなった。

2回ともそれぞれ2グループに分かれて議論し、成果を発表した。こうした活動がすぐには実を結ぶことは難しいが、縁があって長岡周辺で建築や都市を学ぶ学生がNPOや行政とともに議論する機会を得られる意義が大きく、来年度以降も継続して開催・参加していきたい。



写真 05 フィールドワークの状況（実績報告書より転載）

・活動等のインターネット上の告知、広報

WEB サイト（下記 URL 上段）および Facebook ページ（下記 URL 下段）を更新し、情報発信をした。

<https://machiban.amebaownd.com/>

<https://www.facebook.com/machiban.nagaoka/>

2) デザイン・アート活動の連続展開

前年度いっばいの 2020 年 3 月で「第一安達ビル」との賃貸契約が切れ、建物の解体が予定されているため契約の継続が叶わなくなり、プリン長岡という拠点がなくなった。

それと同時に起こったコロナ禍により集まって行うデザイン・アート活動のための新たな拠点を考えることは諦めざるを得なかった。2020 年度の活動を以下に示す。

・長岡芸術工事中 2020（11 月 4 日～2 月 16 日）

2015 年春に始まった「ヤングアートディスプレイ in 大手通」に端を発する、長岡悠久ライオンズクラブと長岡造形大学が主催、長岡市とながおか若者しごと機構が共催するアートイベント「長岡芸術工事中」を 2020 年度も継続して行った。中心拠点の喪失とコロナ禍によるイベントの縮小による「長岡芸術工事中 2020」は、運営する学生や主催・共催のメンバーからなる実行委員会のアイデアで、WEB を使ったオンラインイベントとなった。

これまでの拠点ツアーを柱に、現地での一般観覧・関係

者を集めてのオープニングセレモニー・イベントは行わず、WEB カメラ等を通して映像配信することで「観覧」可能にする企画である。416STUDIO WATARIMACHI をキーステーションに市内の各アート実践箇所、市外のゲストアーティスト、東京や海外とつないで生トークイベント等を開催し、録画コンテンツも入れた。期間中のタイムテーブル（どんな作品がどの時間帯で「観覧」できるか）を WEB 上にアップして、視聴環境の整備に最大限努めた。また、ロゴマークのマニュアル化に取り組み、過去の作品についてもアーカイブ制作し WEB 上で観覧できるように取り組んだ。

目的は「デザイナーや芸術家、またはオルタナティブな活動を志している若い世代の作品発表の機会の創出や、制作活動環境に焦点を当て、各拠点を市民やその他の地域からの一般の人々に向け公開し、地域のみならず広く文化の向上と活性化を目的として、長岡の街を舞台として開催する」ことである。ギャラリーツアーはバーチャル展開となり、学生がカメラを持ってまちあるきの後、拠点のカメラに切り替えた。アトリエや工房もオンライン公開可能であり、美術館のような既存施設での活動ではなく、シェアハウスやコミュニティスペースなどでの活動は、新しいオルタナティブな試みとして最近では一般的に行われている。「同じ場所に集まって活動ができない」状況の中で、不自由な点もかなりあり、想定外のことも起きるが、まさにオルタナティブなやり方で、時間を共有して場所を超えて一緒に体験できるオンライン開催であった。徐々に試行錯誤しながらより良いものを志向したことは、少しずつ作り上げるという意味でも「芸術工事中」の 1 つの魅力となった。オンラインに伴い会期を長くし、全 5 回配信した。Youtube チャンネルも開設してアーカイブ残っているため、ライブでなくても空いている時間に手軽に視聴できる点では好評であった。

ただ、会議もオンラインなので実行委員同士のコミュニケーションに難があり、オンライン開催のため、より重要な SNS 告知もあまりできず、さらに配信に必要な専門技術を持つスタッフの確保・育成にも課題が見られた。何よりも当初は学生の作品をまちなかに飾って市民から直接見てもらう形から始まったが、一般市民から見ると距離ができ、内輪じみて見える点もあったようだ。ネットに明るくない世代もいる中で対面式の良い部分と併用してハイブリッドに展開できるようにすべきであることは否めない。



図2 11月と12月のタイムテーブル



写真 06 11月配信時の撮影状況



写真 10 12月配信時の中継（庭と窓）



写真 07 11月配信時の中継（416SUTADIO_WATARIMACHI_KURA）



写真 11 12月配信時の中継（コスモサンシャイン）



写真 08 11月配信時の中継（工房このすく）



写真 12 2月配信時の撮影状況



写真 09 12月配信時の中継（屋外）



写真 13 2月配信時の撮影状況

3) 互尊文庫の活用検討

2018年度に互尊文庫の建築史的価値づけを行った。この建築は日本の地方における公共図書館の歴史にとって非常に重要であることから、2020年5月「日本におけるモダンムーブメントの建築」選定建築物になった。明治公園と一体でまちなかでの利活用が考えられるが、2020年度は具体的にデザイン・アート活動との連動を図れなかった。ただ、佐藤研究室・津村研究室の3年生後期のゼミ課題として、この建築の魅力探しからグループでのブレインストームを踏まえ、活用案を作成した。運営方法等も検討し「解体までの暫定利用」とした考え方も出た。周辺リサーチが未完なのであえてアートセンターありきでの具体案の検討はしなかったが、2020年度は一応の成果があった。このようにスタディを進めたものを市民に提示できれば、よりこの建物および場所の認知が上がるので、引き続き進めたい。

4. まとめ

長岡市の中心市街地でのデザイン・アート活動とリノベーションまちづくりとをコラボレーションさせ、新たな展開を図る3年間の試みは、「肌感覚でのまちなかの動きの把握ができておらず、直接の関係者以外の方々を巻き込む情宣活動ができていない」「通常の研究活動の一部として本研究の活動を組み込むことがいまだ叶わない」といった課題が完全には解決できず、実践手法の確立には至らな

かった。だが、「長岡芸術工事中2019」では、既にまちなかで起きている低未利用空間をうまく活用している活動と、デザイン・アート活動をまちなかにもたらず動きが、ある程度シンクロする胎動が感じられた。「長岡芸術工事中2020」では、コロナ禍で集まれないからこそ、幾つかのオルタナティブスペースをオンラインでつなぐことが可能となった。まちづくりの根底を覆すかもしれないが、「場所」に拘らないニューノーマルな手法試行ができた。

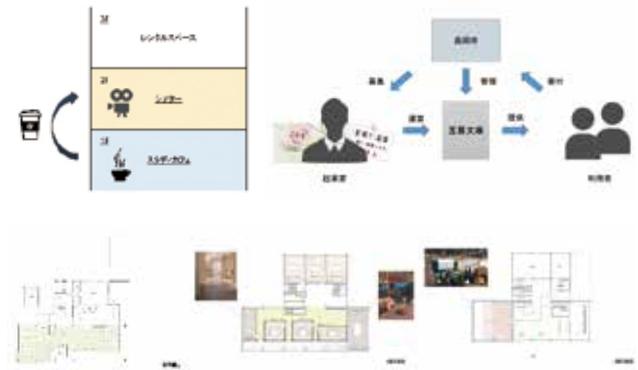
繰り返しになるが、非日常が日常になるには地道にやっていくしかない。あちこちに見られた萌芽が育ち、それらがいずれ花開くよう継続的にアクションをする、それしかないと感じる。この3年をきっかけに刻々と社会状況が変わる中、遅く、まちなかでデザイン・アート活動によるリノベーションまちづくりが進められれば本望である。

【参考文献】

- 1) 遠藤良太郎ほか「地方都市中心市街地におけるデザイン・アートワークの役割 (その1~その3)」長岡造形大学紀要第14、15、16号
- 2) 津村泰範ほか「デザイン・アート活動がけん引するリノベーションまちづくりの実践研究 その1、その2」長岡造形大学紀要第17、18号



図3 佐藤研究室3年生の提案より抜粋



耐震補強について

- ・ひび割れやかぶり厚が足りず鉄筋が露出している部分
- ・一階床コンクリート打増工法で柱を炭素繊維シートで被覆
- ・鉄骨ブレースによる補強
- ・吹き抜けの安全性を確保
- ・全ての柱や壁の補強にはおよそ1000~2000万円かかると思われるが、本による積載荷重が減るため実際はこの半分程度と予想



図4 津村研究室3年生の提案より抜粋